

自然の美しさに気づく、
池本朝子氏の『水辺の世界』

私も作者同様、水辺で時間を過ごすことを愛し、そんなとき、この趣ある短歌集のタイトルのように自分も水辺の旅人であるとかつと感ずることがある。

この本を初めて手にしたとき、池本朝子氏が繰り返す詩的で繊細な世界にまぎれ魅了された。特に、最初からこの短歌集の歌詞エッセイメントとして現れる水の特性の描き方に深い感動を覚えた。ある短歌では水そのものを我々に。感じさせ、この厚いエッセイメントと一体化させる。

私自身も万物の生命に不可欠な成分である水についてはとても感じやすく、実際、最近書き下ろした小説は水、そして水の魂に捧げた作品である。

池本朝子氏の短歌が綴るイメージは鮮明で生命力に溢れており、ときには読者を魔力の世界に招待する。輝く小魚の歌に出会うと読者もその銀色世界に連れ出され、青鳥が表現されると川辺でじっとしている青鳥の姿が目の前に現れ、作者のみならず読者もしなやかな足のすくみを感じながら甘美に溶ける美しい世界を想起する。

そんな作品群のなかで私の心に一番強く響いたのは（広がる海に釣られて足は向くふかぶか馴染まれる場所）という短歌で、この作品の強さはダイナミックな海の広大さにあり、この情景には作者

同様、私も魅了される——浜辺で波にゆらゆらと揺れる胸を見ると、あの穏やかな力強さを感じるので、生命力ある心象を捕え、1羽の鳥になりたいと思わせるほど、果てしない力感を読者に与える。そして、池本朝子氏の魅力的な詩的世界への短い旅は次の短歌で締めくくられる（地図上で十センチ足らずのわが旅は虫の動きにも似て天高し——これらほんのわずかな語数で、人生における私たちの歩みのはかなさ、天の無限さ、そして我々を取り囲む現実の限りない神秘を池本氏は遺憾なく表現しており、息をすることも忘れられるほど驚嘆する探索の旅に読者を連れ出す。

最後に、この短歌集は子どもが描く世界のようにシンプルで繊細なラインのイラストで装飾されている——それは美的表現においても意味においてもその内容をより豊かなものになっている。カラフルで心揺さぶる短歌のイメージを読者に与えるには、アーティストにとっては色彩の描きだけで十分なこともある。

池本朝子氏は日本語、私はイタリア語という異なる言語を話す、自然に対する愛という点で、私たちは深いところで共有する世界を持ち、自然の美しさは私たちを強く結び付ける。池本氏がこれらも末く短歌を私たちに贈り続け、その短歌に触れる幸運な人たちの心と魂に感動を与え続けることを、心から祈る。

短歌がなくなぐもの——イタリアからの手紙

イタリア・フィレンツェでの展覧会で短歌作品を出品して以来、親交を温めてきた池本氏とイタリア詩人、デイエゴ・マンカ氏。2008年6月から、フィレンツェで池本氏の『水辺の旅人』が発売されることから、デイエゴ氏から手紙が届いた。

評 ● デイエゴ・マンカ 絵 ● サイトウマサツ

